


 巻頭言

創刊 73 年目を迎えて

一般社団法人 日本植物防疫協会 理事 ふじ 藤 た 田 とし 俊 かず 一



謹んで新春のお慶びを申し上げます。昨年は北陸地域の豪雪からはじまり、西日本の豪雨災害、大阪や北海道の大地震、相次ぐ大型台風襲来による豪雨や暴風等、災害つづきの1年でした。記録的な猛暑も忘れることができません。新年がどうか平穏な1年であることを願わずにはられません。

さて、本誌は創刊73年目に入りました。昨年の第72巻1号から本誌のイメージを大きく刷新し、まる1年が経過したことになります。読者諸兄の評価はいかがでしょう。

本誌の創刊は、日本植物防疫協会の前身である農薬協会時代まで遡ります。長きにわたり本誌の刊行を続けてこられたのも、歴代編集委員の献身的なご尽力と、快く執筆・寄稿に応じていただいた全国の植物防疫関係者のご協力の賜物であり、感謝に堪えません。

他方、学術的な商業誌が相次いで姿を消していく中であって、本誌もこれまでたびたび苦境に直面してきました。記憶している限りでも、植物防疫関係組織の統合や縮小、活字ばなれの顕在化やインターネットの普及といった時代の節目ごとに本誌のあり方が少なからず議論され、マイナーチェンジも試みられてきました。昨年の誌面刷新に際しても、舞台裏では多くの議論が交わされましたが、実践的に役立つ技術情報誌でありたいとの願いは、創刊以来変わることなく受け継がれてきた本誌のDNAであろうと思います。この1年で新規の購読者が増えたのは誠に喜ばしい限りです。

ところで、最近のデジタル技術のめざましい進歩は、農業分野にも新たな技術革新をもたらしつつあります。しばしば耳にする Society5.0 とは、国が推進している科学技術施策のキャッチフレーズで、狩

猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く新たな社会、すなわちサイバー空間 (仮想空間) とフィジカル空間 (現実空間) を高度に融合させたシステムにより経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会 (Society) を実現していくのだそうです。

30年間に及んだ平成時代についていろいろな総括がなされていますが、壁掛けテレビや携帯電話、インターネット等、昭和の時代には想像もつかなかった数々のデジタル技術革新によって生活が激変したのは間違いなく平成時代のトピックです。そして、平成の終焉にあわせAIが登場してきたことに、たんなる改元の節目ではない新時代の幕開けを感じるのは私だけではないでしょう。

一方では、やがてAIに情報入力するのが人間の仕事になる、数十年後にはAIが人間の知能を超える、AIがやがて究極のAIを作り出す、といった不気味な将来予測もあるようですが、かつて遺伝子組み換え技術で大論争がおきたように、大きな技術革新にはこうした論争はつきものです。60年代にカーソン女史が「沈黙の春」の中で予測した化学物質に破壊された未来が訪れなかったように、人間不在の未来にならないための知恵と工夫が必ずや凝らされることでしょう。

植物防疫には古くて新しいことがたくさんあります。新しい技術革新が植物防疫をどのように変えてくれるのか、期待をもって見守りたいと思います。そして、新時代の植物防疫技術を的確にお伝えしていくのが本誌の使命でもあります。本年も一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。